

三栖閘門

三栖閘門は、濠川と宇治川の間の船の往来を容易にするために、1929年に建てられた。両方の川に築かれた堤防のため、濠川と宇治川の水位は大幅に異なり、その間を通るには船を物理的に上下させる必要がある。このため、2つの水門内の水位を、目標とする川の水位に達するまで上げ下げする。これはパナマ運河の水門と同じ工学原理である。建設当時、非常に優れた建築と見なされた三栖閘門は、完成した年に2万隻以上の貨物船が通航した。新しい治水堤防の建設で宇治川の水位が以後変わってしまった後でも、水門により伏見を経由し京都-大阪間の貿易を続けることができた。三栖閘門の完成は、第二次世界大戦前の帝国拡大期に日本の軍事力の増強を促進したため、地政学的な影響力も大きかった。戦後、鉄道開発により水運が廃止され、1962年に水門は操業を停止した。

三栖閘門は、2000年に完全に復旧し改修された。今日、船は水門を通過しないが、現代日本の産業遺産の重要な要素として認識されている。近くの三栖閘門資料館は、伏見の歴史における、内陸の港町としての水門の役割を説明するために建てられた。